

PNGチャイニーズ今昔 —南太平洋の都市の肖像—

塩田 光喜

●白人巨大スーパーの消滅と 漢方抗マラリア剤

異変に気がついたのは一九九四年の乾季八月のことである。シドニーを発ったポートモレスビー行きエア・ニューギニーのジェットは年間降水量三〇〇〇から五〇〇〇ミリのパプアニューギニア(PNG)で、そこだけ年間降雨量一〇〇〇ミリのポートモレスビー周辺の茶褐色の大地を見降ろしながら、滑空していった。

ポートモレスビー郊外のジャクソンズ・エアポートで入国審査を受けると、私はトランクを転がして、空港の外へ出て、タクシーをつかまえる。

「ボロコのだヴ・ホテル」
行き先を告げると、タクシーは発進する。

ドヴ・ホテルは、カトリック教徒が経営する自炊式のアパート型

ホテルで、国中に散らばるミツシヨン・ステーションからファアザー達がモレスビーに出てくる時のための宿泊所として建てられた。したがって、宿代がきわめて安い。一泊二〇キナ(八〇〇円)で、

広いリビングとキッチン、その奥にベッドルームというデザインがとても快適だ。しかも、商業センターのボロコのショッピング・アーケードまで五分という至近の距離。難を言えば、セキュリティ(治安)に若干問題があることだ。一二棟ほどのアパートメントを囲ってブロック塀と鉄柵が張り巡らされているが、当地ではラスカル(悪漢)と呼ばれているギャング達に何度も襲撃されている。

私は旧知のジュリアンに鍵をもらうと、荷物をリビングにおいて、ボロコのショッピング・アーケードへと向かう。

ボロコを中心にデンと大きなスーパーを構えるオーストラリアの海運・流通・プランテーションの大手、バーンズ・フィルプ(以下、BP)に海員毛布と料理のための食料を買いに行くのが、ドヴにチェックインして最初に行うお決まりのルーティンだ。

BPは一九世紀、南西太平洋の島々(フィジーやパプアやソロモン諸島など)がイギリスやオーストラリアの植民地になり、統治官吏やプランター(入植者)や黄金のプロスペクター(探鉱者、山師)が入ってくると、彼らの生活用品や商売道具をオーストラリアから供給することから始めて、大企業となった南太平洋交易の草分けだ。

ポートモレスビー近傍は気候的にオーストラリア北部と同様、乾燥サバンナ気候で、良い港である

ことに加えて乾燥していることが白人に選好されて、パプア統治の拠点とされた。乾季には夜の気温は二〇度以下になる。というわけで、海員毛布となるわけだ。いつもの通り、BPに出かけた私は、アツと驚いた。

「無いー」
あのBPのつかいスーパーが無い！ 代わりに鎮座していたのは、平べったい、ブロック建ての白い建物だった。

中へ入ると、ファーマシー(薬屋)だった。シティー・ファーマシーといい、チャイニーズ(と現地では呼ばれるので、基本的にはこの語を使う)が経営し、中国本土から薬を仕入れているのだという。売りは漢方の抗マラリア剤だそうだが、漢方の抗マラリア剤なんて生まれて初めて聞いた。それを一袋買い、念のため、白人経営のジョンストンズ・ファーマシーで、いつものクロロキンも買っておく。

そしてBPに次ぐ海運・流通・プランテーション大手の白人企業のスTEAMシップスで食料を買って帰る。海員毛布は買えなかった。

●一九八五年ポートモレスビー

私がニューギニア高地で人類学のフィールドワークを行うため、PNGを訪ねた一九八五年一月は、独立からまだ一〇年も経っていなかった。まだ一〇年足らずというべきか、もう一〇年近くが経ったというべきか、難しいところだが、経済は植民地時代からの白人達（オーストラリア人資本）が握っていた。前出のBPやスチームシップスのような大企業から始まって、ファーマシー（薬局）やステーショナリー（文具店）に至るまで、白人企業や白人営業の店が、大動脈から毛細血管に至るまで押さえていた。

●古参チャイニーズのビジネス

ポートモレスビーはまだ、コロニアル・タウン（植民地の町）の風貌を色濃く残していた。

当時の人口は一〇万強。その内、PNG人一〇万、白人一万、チャイニーズが一〇〇〇、日本人が一〇〇人だと言われていた。

その頃のチャイニーズは、太平洋戦争前に広東や福建から、最初は白人経営のプランテーションの苦力として渡ってきた移民の子孫達だったが、苦力とはつくに卒業

して、都市でビジネスを営むビジネス階層にのし上がっていた。彼らの特権的ニッチは、今も昔もレストランだ。最高級はマルコ・ポーロ・レストランに代表されるゴージャスなレストランで、白人やチャイニーズのビジネスマンやPNG人政治家や高級官吏を顧客としていた。私が入るのは日本大使館の人や大手商社の駐在員の方に奢ってもらう時で、パプア湾で採れた自身で肉の締まったバラミンディのあんかけ（これとはびきり旨い）や時には一匹のカニをゆでたのをボールに張った水で手をすすぎ、身をせせりながら喰うという特上のぜいたくもさせてもらった（一食五〇キナはしたと思う）。

私がフィールドからポートモレスビーに帰ってきた時、友人の西沢君を誘って行くのが、イースト・ポロコのカントン・ヴィレッジ（廣東村）で、ここは豆腐一丁の上に小さなエビをのせ、シヨウユをかけて、鉄板で炒めた「鉄板豆腐」が名物だ。ジュウジュウ音を立てる鉄板豆腐にはしをつけると、「ああ、モレスビーに帰ってきたんだな」と実感する。一皿数キナほどの料理で、ここには白人もチャイ

ニーズも来るが、中から上級のPNG官吏やビジネスマンがワントク（同族）を一〇人ほど連れて、散財する場でもあった。言わば、中級のレストランと言えるだろう。ここは二〇キナで満腹にしてくれた。

モレスビーの昼飯はタウラマの安飯屋で、ロング・スープという名のラーメンのビーフン版だ。二〜三キナ、サイドディッシュに肉や野菜を炒めたのをつけても四〜五キナだ。ただし、油が悪いので、時々胸が悪くなる。このオヤジは鶴のような痩身の老人で、店先の椅子に座って、ゆっくりキセルを吸っていた。

タウラマはまた、チャイニーズ経営のスーパーが二軒あった。「スーパーセーブ（超お安い）」と「スーパーバリュー（超お得）」という名の、BPやスチームシップスより安い食品をモレスビーのPNG人サラリーマン向けに売っていて、夕刻には、帰宅途中のPNG人でごった返した。このことBPやスチームシップスの違いは、ベーカーリーがないことで、焼き立ての旨いパンが食べられれば、BPやスチームシップスへ行かねばならない。逆にBPやス

チームシップスにはない、森永の真空パックの豆腐やインド製のカレー・パウダーが揃えてあった。そして、最大の違いは、BPやスチームシップスのフロア半分を占める家電製品のコーナーがないことだった。

●古参チャイニーズと日本人

ポートモレスビーのチャイニーズは皆、ビジネス階級であったから、身なりもリュウウとしていた。顔立ちも日本人と変わらない。だが、しばらくすると、向こうから歩いてくるのが日本人かチャイニーズか、私には一目でわかるようになった。顔付きが全く違うのだ。

私の判別法はこうだ。顔に一分の隙もなければ、チャイニーズ。彼らに比べると、日本人は顔の真ん中にドカーンと穴が空いている。私もそうだったに違いない。思うに、この違いは、我々日本人は国があるのは空気が存在するのと同様に自明、と無意識の内に思っているのに対し、チャイニーズは国などというのはいくつのフィクションで、いつ失くなるかわからない代物だとこれも無意識のうち思っている所から来るのでは

ないだろうか。

彼らチャイニーズのほとんどがオーストラリア（主としてクイーンズランド州のブリスベーン）に親族と不動産を持ち、自らもオーストラリア国籍を持ち、いざとなればいつでもオーストラリアに移れる態勢を整えていた。そして、インターナショナルスクールやミッション・スクールで英語で初等教育を受け、中等教育はオーストラリアのボーディング・スクール（寄宿学校）で、高等教育はオーストラリアの大学で受けていた。そして、彼らはマンダリン（北京官話）はもとより、広東語も福建語も話せない。

西のヨハネスバーグ、東のポートモレスビーと並び称されるように、失業率七〇%とも八〇%とも言われるポートモレスビーはきわめて治安が悪い。エクスパトリエイトと呼ばれる外国出自の白人やチャイニーズや日本人などPNG人とは明らかに顔立ちが異なる居住者は、夜は外を歩けない。強盗に遭う危険性がきわめて高いからだ。昼でも危ない。海外青年協力隊（ちなみに、PNGに女性隊員はいなかった。）の隊員が、協力隊のオフィスを訪ねてパティリの

バス停で降り五分の間にラスカル・ギヤングに遭い、文字通り身ぐるみはがされて全裸でオフィスの駆け込んだこともあった。

私の知人のチャイニーズ・ビジネスマン（彼は高級レストランを経営し、貿易業を営み、ナマコの買付を行っていた。）に、なぜこんな危ないところでビジネスをやっているのか質ねたことがある。彼は眉ひとつ動かさず、言下に「ハイ・リスク、ハイ・リターン」と言っただけのけた。

危ない所だけに、逆にオーストラリアなどでは稼げないようなりターンをもたらししてくれるビジネス上のニッチが存在するのである。そして、チャイニーズ達には、ニッチを探り当てる独特のビジネス嗅覚が発達し、リスクを冒して大胆にチャンスを取りに行く逞しさが備わっていた。天性のリスク・テーカーなのである。東京の指示ばかり待っている日本人ビジネスマンが束になっても敵わない。

●「西部の街」マウント・ハーゲンとPNGナショナルリズム

私のフィールドであるニューギニア高地のインボング族の最寄りの町マウント・ハーゲン（一九八

五年時点で人口一万人強）の西の入り口ワギ・パレードのバス停には、ハーゲンより西の南高地州（人口二〇万人）、エンガ州（人口一五万人）、西高地州西半分（人口一〇万人）からコーヒー豆を積んだトラック（トヨタ・ダイナード！）やハーゲン・タウンにショッピングに来る人々を載せたマイクロ・バスや幌付きトラックが午前中に続々と横付けし、午後には人々を載せて散って行く。

バス停の反対側には、PNG屈指の豪商シートー家の経営するシートー・クイの巨大な木造の卸の店（ここで、村々の万屋は店で売る米、缶詰、コンビーフ、コーラ、灯油、冷凍肉を買っていく）を初めとするチャイニーズの大きな卸屋がズラリと並んでいる。

周りに後背地を持たない政治都市ポートモレスビーとは異なり、四五万の後背地とそこで産出されるコーヒーによって支えられているマウント・ハーゲンは、ビジネス・パイプレーションの脈打つ荒々しい「西部の町」だ。人口一萬強の町なのに、オーストラリアの大銀行、ウエストパックとANZが支店を構えているのは、その旺盛なビジネス活動の証である。

一九八五年六月、私が初めてマウント・ハーゲンのカガムガ空港に足を踏みおろす前日、そのウエストパックが銀行強盗に遭っていた！ ポートモレスビーがのんびりした南太平洋のポート・タウンに見える程、ハーゲンの町は荒々しいダイナリズムにあふれた町だった。

だから、そこにおける人種間関係も荒々しかった。PNGでは、どこでもそうだが、スーパーのレジの出口には回転式の鉄のバー（遮断棒）が付いていて、棍棒を持って立っているガードマンが出てくる客をチェックする。私のようなエクスパトリエイトはノー・チェックだが、村々から出てきた女達（網袋を肩にかけたり、ひたいに掛けたりしている）や若い衆は網袋やポケットを入念にポディー・チェックされる。まるで泥棒扱いである。レジ奥に座っている、チャイニーズのマネージャーが鋭い視線を飛ばす。ハーゲンで仲良くなったロッジの主人であった私の友人は、ハーゲンのビジネスマンの息子達は、インターナショナルスクールから帰ってくると帳場に座らされるのだと言った。「そこで、ビジネスを一

から学ぶんだ。白人もPNG人も我々の敵ではないのは、小さい頃からみっちりビジネスのイロハを学んでいるからなんだ。」と打ち明けた。そう、ハーゲンのチャイニーズには、独特のビジネス文化があった。

だが、そのビジネス文化にはニューギニア高地人のプライドを傷つけるものがあつた。ニューギニア高地人は戦士民族である。彼らのプライドは「素朴な石器人」という言葉で表象されるイメージと裏腹に、きわめて高い。武力で自分たちを打ち負かした白人や自動車や電器製品などきわめてモダンな製品を作っている日本人には一目置かず、チャイニーズにはビジネスでは敵わないが商業の民より、俺達、戦士の子孫の方が高貴なのだという感情が渦巻く。インボング族の間では、商売は上手いが吝嗇な男は、陰で「チャイナ」と呼ばれていた。語尾を上げる独特の発音だ。怨恨と軽蔑と羨望の混じったアンビヴァレントな感情を酵母にして、きわめて酒精分の高いナシヨナリズムが、PNGの特に初等・中等教育を受けた人々の間でゆつくりと醸成されていったのである。

●新参チャイニーズとPNG ビジネスマンの勃興

B P が撤退した後に空いたニッチを埋めたのは、東南アジア華僑の大資本だった。T S T とかパピンド（パプアインドネシアでパピンドだ。）といった大スーパーがB P の顧客だった白人やPNG人政治家・高級官僚・ビジネスマン層を奪い取った。

T S T やパピンドはB P やステイムシップスと違って、タウン（ビジネスセンター）やポロコ（商業センター）には出店しなかった。ハイウェイ沿いに鉄のフェンスを張り巡らし、広大なパーキングを設定し、その奥にスーパーを建てるのだ。こうして車を持っている上流層（ポートモレスビーでは人口のごく一握りだ）のみが入店できるといふ仕組みである。街をぶらつく失業者の冷やかし客を排除できるメリットがある。ポートモレスビーは二二世紀には人口三〇万に増えていたから、そうした選別を行っても客は十分確保できたのだ。

同じ頃、再び広東や福建から小金を持った大陸チャイニーズがどっと押し寄せてきた。鄧小平の南巡講話の後のことだ。

彼らは賄賂を使って不法入国してきたと噂された。彼らは道路沿いのレンガ建ての倉庫の一角にレストランを構えた。顧客は成長してきたPNG人ビジネスマンだ。彼らは昼時、倉庫脇に車を止め、レストランに入っていく。メ

ニューは二〇種くらいあり、白御飯かチャーハンの上にとっさりとなや豚や鶏をシヨウユと大量のグルタミン酸ナトリウム（味の素）でローストやグリルやブレイズした肉を載せて供される。一〇キナから一二キナというのが相場だ。味の素恐るべし！ その旨味は急速にPNG人の舌を征服しつつある。その尖兵は、即席ラーメンと大陸チャイニーズのレストランだ。

客はガツガツと飯をかつこみ、ゴクゴクと喉を鳴らして水を飲む。腹をマンタンにすると午後後のビジネスに飛び出していく。だが、知り合いをみつけるとテーブルを共にしてビジネス・トークが始まる。こうしたレストランはインフォーマルなビジネスの場合なのだ。大陸から一攫千金を目指してPNGに乗り込んできた新参チャイニーズと勃興しつつあるPNG人のビジネス階級が相乗して、レ

ストランに古参のチャイニーズ・レストランにはなかつた慌ただしさと活気と熱気を与えている。（私は新興のPNG人ビジネスマンのモデルは、チャイニーズではないかとにらんでいる。）

もはや一九八五年のコロナル・タウンの面影はない。二〇〇六年のポートモレスビーは今や、金・銅・石油・ガス・熱帯材・マグロといった豊かな資源の開発に沸騰する新興国のビジネス・シティーだ。それと共に、格差は急激に広がる。

二〇〇九年、パプアニューギニアの主要都市で、燎原の火の如く、反チャイニーズ暴動が広がった。タイム誌の記者にドライバーはこう言った「もし、PNGにチャイニーズを一掃する一団ができたら、オレは真っ先に加わるぜ。俺のブッシュ・ナイフを磨いて、一〇も二〇も首を刎ねるのさ（TIME誌、二〇〇九年二月七日、二七ページ）」。

（しおた みつき／アジア経済研究所 貧困削減・社会開発研究グループ）